

松田 亮三

(産業社会学部教授／人間科学研究所所長)

それでは、ただ今から 2014 年度立命館大学人間科学研究所年次総会、ならびに文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」公開研究会「対人支援における大学と社会実践の連携を展望する」を開催していきたいと思います。

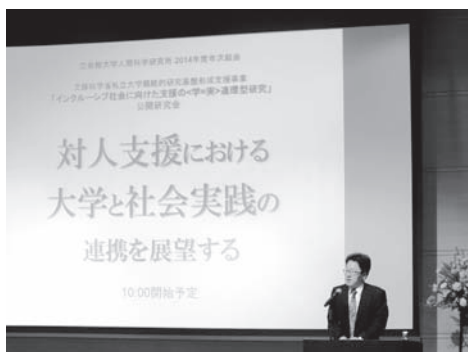
申し遅れましたが、私は人間科学研究所所長、産業社会学部教授の松田と申します。どうぞよろしく申し上げます。

開会に当たり、簡単にごあいさつを申し上げたいと思います。人間科学研究所は 2000 年に設立されまして、もうすぐ 15 年という歴史になります。この間、研究所として、さまざまな事業を採択して、全体で取り組むという全所的プロジェクトを推進してまいりました。

その成果発表の機会として、また普段さまざまに展開されている研究の成果をお互いに交流して、新たな研究に展開していくということを目的としまして、この年次総会を開催しております。今回で 3 回目ということになっております。

同時に昨年度より、先ほど申し上げました全所的プロジェクト「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」、トランスレーショナルな研究を対人支援の分野で進めていく。このプロジェクトに関して、後ほどご登壇されます稲葉先生が代表となられて進めていらっしゃいます。この場はこのプロジェクトについての公開研究会でもあります。

このプロジェクトは今日、これから非常にさまざまな具体的な中身が話されるわけですが、この年次総会としては、



これまで半日で行ったのですけれども、今回1年間の取り組みを含めてさまざまなかたちで成果を出していこうということで、非常に充実したプログラムになりました。

まず、このプロジェクトを推進されている稲葉先生にお礼申し上げるとともに、本日も土曜日という中、また朝早くからご出席いただいて講演や対談企画、パネルディスカッションにご協力いただいている先生方、特に研究所外の先生方に、いちいちお名前は申し上げませんが、本当に感謝申し上げたいと思います。

それから、このプロジェクトに関しては外部評価の先生もお願いして進めているところでして、今日は外部評価の委員の先生にもご出席いただいています。お忙しい中をご出席いただいたことを、厚くお礼申し上げます。

さて、一言だけ申し上げたいのは、研究所として、学際的研究所ということで、この研究所のスタッフも幅広い研究科、幅広い学部から参加して研究を進めています。

今日はたまたまと言いますか、ご存じのとおり阪神・淡路大震災の20年目の日に当たるということで、この大きなイベントというか、出来事は関西地方だけでなく、日本全体でも大きく受け止められたことだと思います。その後、われわれは東日本大震災を経験して、現在復興の途中ということでございます。

人間科学そのものは、復興の建設とか、そういったことに直接は関わらないかもしれませんが、人が生きて行く社会の中で、そういった大きなイベントがどういった困難をもたらし、それをどう克服していくのか。この問題を研究者として受け止め、それぞれに取り組んできたことと思います。そういう意味で非常に大きな課題ですがこれは、継続して現在も続いているということをお願いしたいと思います。

また、この間世界的に見ますと、新たな紛争と言いましょか、大きなコンフリクト、葛藤が生じております。テロリズムや内戦といった問題が、残念ながらいまの社会ではなくならない。そういった問題にもわれわれの研究所のメンバーは取り組んでいますけれども、そういったさまざまな困難にいかにか立ち向かっていくのか、そしてそれをどうお互いに協力しつつ、支援の活動を取り組んでいくのか。こういったことで言いますと、研究所の課題はまだ山積

みだということ考えています。

今日の研究会では、そういった課題に直接すぐに関わる研究課題もありますが、その他のさまざまなレベルの研究活動が報告されます。特にポスターセッションに関しては、萌芽的なものも含めまして多様なものがありますけれども、それらすべてが現代社会の課題について最終的に何らかのかたちでその問題の解決に寄与できることを願っています。

ちょっと長くなってしまいますけれども、以上で私のごあいさつを終わります。

本日はかなり長丁場でございますが、大いに議論をして、お互いに交流していきたいと思っています。どうも、ありがとうございました。